

# 冬の観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和三年一月二十三日(土曜日) 午後二時三十分開演

## 狂言 酢薑(すはじかみ)

摂津の国の薑(生姜)売りが都へ出て商売を始めます。そこへ和泉の国堺の酢売りが来て和泉酢の売り声を上げ、二人は売場を争います。互いに商人司の勅許を得た由緒を誇り、根拠として系図を語ります。薑売りは「から(辛)」の音、酢売りは「す」の音を織り込んで、なかなか聞き事な語り口です。「から」尽くし、「す」尽くしの秀句の応酬が続くと、互いに相手の口利きを認め合います。気がつけば昔から酢と薑は料理の相性もよく、明日から相商いにしようと約束し、どっと笑って別れます。

## 能 春日龍神(かすがりゆうじん)

桐尾高山寺の明恵法師(ワキ)が入唐渡天の志を立て、暇乞いのため南都奈良の春日明神に参詣します。そこへ春日の神域と祭神天の児屋根の命を賛美する宮守の老人(前シテ)が現れます。老人は四季折々に参拝する明恵の顔と名前を覚えています。入唐渡天の志を知り、仏跡を拝むためなら、春日山こそ釈尊ゆかりの靈鷲山であり、明神や鹿が明恵を出迎え、礼拝する真の浄土を去るべきではないと諭します。老人はさらに詳しく、唐土の天台山なら比叡山、五台山なら吉野・筑波を拝めばよい、春日明神は釈尊と一体、鹿のいる春日野はまさに説法の地鹿野苑ではないかと説いて、これを春日の神託と受け止めた明恵は、入唐渡天を思いとどまります。老人は時風秀行を名乗り、三笠山に五天竺を移し、釈尊の誕生から成道・説法、入滅までを見せると予告します(中入)。やがて神託のとおり春日の野山に光が射し、草も木も金色に輝く仏の世界が顕現します。その時、大地が振動して、百千眷属を引き連れた竜神王(後シテ)たちが下界の水宮から釈尊の説法に参会します。四緊那羅王、四乾闥婆王、四阿修羅王も、多数の眷属を引き連れて説法聴聞に列座します。竜女が立ち舞う白妙の袖は海原の波を払い、波には緑の空色が映り、沖を行く月の舟は佐保川に浮かび出ます。竜神は月の出る三笠山の雲に上がり、釈尊の生涯を悉く明恵に見せて、入唐渡天の断念を確約させます。竜神は千尋の大蛇となつて猿沢の池に消え失せます。

(西村 聡)

前シテ(宮守の翁) 尉髪をつけ、翁烏帽子をいただき、小尉の面をかける。小椅子厚板を着附に着、白大口をはき、上に縷狩衣を着て、腰帯をしめる。(持物、扇、萩帯)  
後シテ(龍神) 赤頭をつけ、龍台(龍)をいただき、黒髭の面をかける。厚板を着附に着、半切をはき、上に袷法被を着て、腰帯をしめる。(持物、扇、打杖)

(午後四時三十分頃終了予定)